

近代ナショナリズムをめぐる理論的思索と実証的研究 —日本の植民地統治を中心に—

樋浦 郷子・山本 和行

1. はじめに

本研究によって日本語訳を期した原著は、Rwei-Ren Wu, *The Formosan Ideology: Oriental colonialism and the rise of Taiwanese nationalism, 1895-1945* (以下、呉論文と略記) である。この論文は、2003 年にアメリカのシカゴ大学に提出された呉叡人氏(台湾: 中央研究院台湾史研究所助研究員)の博士論文である。全5章から構成され、章立ては以下のようになっている。

- Chapter 1 Introduction: Colonial Taiwan and the Theories of Nationalism
- Chapter 2 Differential Incorporation: Japan's Colonial Nation-Building in the Peripheries
- Chapter 3 Becoming National: Political Struggle and Discourse of Taiwanese Nation-State, 1919-1931
- Chapter 4 Becoming Essentially National: Cultural Resistance and the Discourse of Taiwanese National Culture, 1919-1937
- Chapter 5 Conclusion: Nationalism under Oriental Colonialism

本プロジェクトでは、このうち Chapter1 と 2 にあたる部分の日本語訳完成を期した。Chapter3、4、5 については、既に平成 18 年度研究開発コロキウム、山本和行研究代表「近代ナショナリズムと帝国主義の展開と相克をめぐる基礎的研究—台湾・韓国・沖縄を中心に—」(平成 18 年度「魅力ある大学院教育」イニシアティブ 京都大学大学院教育学研究科「理論・実践融合型による教育学の研究者養成」)の研究成果報告書において日本語訳を提出している。本プロジェクトは、呉論文の日本語訳完成を目指したものと位置づけることができる。

Chapter1 と 2 の概要は以下の通りである。Chapter1 は呉論文の問題意識と、課題解決のための理論的な枠組を提示している。呉論文の理論的な研究枠組の中心となって

いるのは、アンダーソン⁽¹⁾とチャタジー⁽²⁾という 2 名の著名なナショナリズム研究である。呉論文はこの 2 名の研究成果を批判的に継承し、独自の「アンダーソン・チャタジー理論 (Anderson-Chatterjee thesis)」に基づき、台湾におけるナショナリズム形成のための分析軸を提示している。

また、Chapter2 では日本における近代国民国家形成のプロセスを概観している。その国民国家形成の延長線上に日本の植民地統治政策を位置づけ、日本による植民地統治方式の類型化を試みている。

本プロジェクトでは Chapter1 を完訳し、Chapter2 についてはフィールド調査による基礎資料の収集と日本語訳の草案作成を行なった。次年度以降の研究活動に全文の翻訳完成を期したい。本稿では訳文の完成に至った Chapter1 の内容に即して本プロジェクトの研究活動を報告する。そのうえで、今後の研究計画との関連で、Chapter2 に関する研究活動についても言及することにした。

2. 研究内容の概要—Chapter1 を中心に—

呉論文の Chapter1 は、以下の 4 つの節から構成されている。「第 1 節 論点としての台湾ナショナリズム (Taiwanese nationalism as question)」、「第 2 節 先行研究の検討 (literature review)」、「第 3 節 本研究の議論 (arguments of this study)」、「第 4 節 構成と方法 (structure and methodology)」である。本章には呉論文の研究のモチーフが示されている。以下、4 つのポイントに分けて概観する。

(1) 問題意識

呉論文の問題意識は、Chapter1 の冒頭に明確に示されている。それは、「17 世紀以来中国からの移民地であり、1885 年から 1895 年まで暫定的に清朝の一省であった台湾が、なぜ日本の植民地統治下で「中国人の台湾」や「中国的」といった中国ナショナリズムではなく、「台湾人の台湾」や「台湾的」という、はっきりとした台湾ナショナリズムの成長をみるに至ったのか? (Why should Taiwan, a colony of Chinese settlers since the seventeenth century and briefly a province under the Ch'ing Empire between 1885 and 1895, have witnessed the growth of a distinct Taiwanese nationalism of "Taiwan for Taiwanese" and "Taiwanese Uniqueness" instead of a Chinese nationalism of "Taiwan for China" and "Chinese Uniqueness" under the Japanese colonial rule?)」(呉論文、3～4 頁。以下、呉論文からの引用には頁番号のみ表記する)を解明することにある。つまり、なぜ台湾において「中国ナショナリズム」ではなく、「台湾ナショナリズム」が生じたのかを解明することにある。これは、歴史研究における重要な課題であるとともに、中台関係を考えるうえですぐれて現代的な課題でもある。

(2) 先行研究の検討

以上の課題解明のため、呉論文はナショナリズム研究、とりわけナショナル・イデオロギーについて分析した先行研究に基づき、分析軸を設定する。そこで参照されているのが、上述したアンダーソンとチャタジーの研究である。

呉論文はアンダーソンの研究を「領域理論 (territorial thesis)」とし、チャタジーの研究を「イデオロギー・文化理論 (ideological-cultural thesis)」であると整理する。まず、アンダーソンの研究は、「特定のナショナリズム・イデオロギーの標準となる内容を分析することではなく、経験的かつ歴史的に、いつ、どこで、どのようにして (すなわち、どのような条件の下で) この普遍的形態が発生し、世界の他の地域へと広がるのかという点を論ずること (The most important theoretical issue for him therefore is not to examine the normative content of particular nationalist ideology but to explain empirically and historically when, where and how—that is, under what conditions—this universal form originated and spread to other parts of the world)」

(10～11 頁) に重点を置いていると指摘する。したがって、アンダーソンの研究は、「要するに植民地における民族想像のための領域的基盤がいかんして形成されたかということを説明することになる (Therefore, to explain the genesis of colonial nationalism for him amounts to explaining how the territorial base of the colonial national imagination was formed)」(13 頁) と指摘している。

これに対し、チャタジーの研究は、アンダーソンが分析したような領域的基盤の形成に重点を置くのではなく、ナショナリズムのイデオロギー的・文化的な内実がいかんして形成されていくのかを分析するものであると指摘する。チャタジーは「民族というイデオロギー上の産物 (ideological construction of the nation)」(14 頁) という表現によって、ナショナリズムのイデオロギー形成のプロセスを問題化する。そして、植民地ナショナリストの思想展開のありようを、「出発のモメント (moment of departure)」、「作戦行動のモメント (moment of maneuver)」、「到着のモメント (moment of arrival)」の3つに分類し、植民地における民族形成のプロセスを解明しようとする。

以上のように先行研究を整理したうえで、呉論文はアンソニー・スミス (Anthony Smith) の見解を参照し、「民族という考え方は領域的要素と民族的・文化的要素の両方で構成されているという見解 (the notion of nation consists of both territorial and ethnic-cultural elements)」(19 頁) を提示する。したがって、アンダーソンの研究は、「『誰が、何を、いつ、どのように想像するのか』という段階的なレベルでの議論を省いてしまうことで、アンダーソンによる研究の構造は、同質のひとかたまりのフィクションが構造的につくりだされ、一様に課せられたものとして、民族を想像する複雑な政治的、かつイデオロギー的なプロセスを過小評価するリスクをはらんでいる (By omitting an argument on the agency level of “who imagines what, when and how,” Anderson’s structural thesis risks reducing the complicated political and ideological

processes of imagining the nation to a structurally produced and uniformly imposed homogenous mass fiction)」(20 頁)。他方、チャタジーの研究は、「植民地民族のイデオロギー的な形成について議論するうえで、構造的に植民地民族の空間を自明のものと想定する。こうした領域的本質主義、もしくは原理主義は、彼の多分に構造主義者のな、つまり、おそらく非本質主義的な植民地ナショナリズムの論文に内包される根本的矛盾をあらわにする (he has to presume on the structural level a pre-existent national space in order to conduct his argument of the ideological construction of the colonial nation at all. This territorial essentialism or primordialism reveals a fundamental incoherence imbedded in his largely constructivist — and thus supposedly non-essentialist—thesis of the colonial nationalism)」(20～21 頁) と批判している。

そのうえで、呉論文はアンダーソンとチャタジーの研究が植民地における民族形成を検討するうえで、「相補的 (complement)」な関係にあると指摘する。つまり、植民地における民族形成のプロセスは 2 つの段階に分けることができる。すなわち、「第 1 段階は、現地の人々がナショナルな考え方を始めるような、共通領域である植民地国家による制度整備である。これは植民地ナショナリズムの発生の段階である。第 2 段階は、現地の人々がナショナリストへとかわり、成熟したナショナル・イデオロギーの形成にとりかかる段階である。この段階で植民地ナショナリズムは民族をつくりだす (The first stage is the institutional forging by the colonial state of a common territory within which the natives begin to think like nationalists. This is the stage of the genesis of colonial nationalism. The second stage is the process through which these natives-turned-nationalists set out to construct a full-fledged national ideology. This is the stage where colonial nationalism invents the nation)」のである。したがって、アンダーソンとチャタジーの研究は、ひとつの「アンダーソン・チャタジー理論」という、植民地の民族形成を検討する分析軸として構成することができるとする。

(3) アンダーソン・チャタジー理論の修正

以上のように、呉論文は「アンダーソン・チャタジー理論」を分析軸として設定し、台湾におけるナショナリズム発生の問題を解き明かそうとする。ただし、そのために呉論文は「アンダーソン・チャタジー理論」がそのままでは適用することができないと指摘する。それは、アンダーソンとチャタジーそれぞれの研究が抱える理論的枠組の特性に由来するとともに、ふたつの研究がともに日本による植民地統治を看過していることによる。

まず、植民地の領域形成にかかわるアンダーソンの研究についてである。アンダーソンは「公教育と共通の排除 (common education and common exclusion)」を通じて植民地的な統合が図られると同時に、植民地の人々が共通の領域をイメージするに至ると説明する。しかし、日本が植民地統治を行なった台湾と朝鮮の場合、植民地の人々がイ

メージする領域は、日本に編入される前から既に一定していた。したがって、「それはアンダーソンのいう無からの想像とは関係がなかったのである (it did not have to do it ex nihilo as Anderson argues)」(23 頁)。つまり、台湾や朝鮮の場合、アンダーソンが問題視した植民地の人々の「統合 (integration)」が植民地統治の課題となったというよりも、人々の「移行 (transformation)」のほうが問題になったと考えるべきであると指摘する。

他方、チャタジーの研究はナショナリズムのイデオロギー的側面を分析するという課題意識のもと、ナショナリストの思想遍歴を重視しすぎることが問題だと指摘されている。これでは、「植民地ナショナリズムは植民地化した国家と植民地化された側とのアイデンティティをめぐる闘争 (民族と近代の緊張) のみならず、同じく民族的であることの意味や誰が民族を代表することになるのかということをめぐる植民地化された側の内部の根本的闘争をも内包している (colonial nationalism involves not only a struggle between the colonial state and the colonized over the issue of cultural identity—the National-Modern tension—but also a no less fundamental struggle within the colonized over what the National means and who gets to represent the National)」(25 頁) という側面を明らかにすることはできない。台湾における植民地ナショナリズム形成のプロセスを明らかにするためには、むしろこうした社会運動的な側面に注目し、そのなかでどのようにして民族の言説が生じたのかを明らかにすることが必要であると指摘する。

以上のように、個々の研究が抱える理論的な困難を修正する必要があると同時に、呉論文はアンダーソンとチャタジー両者の研究が共通して抱える問題点について指摘する。それは両者の研究が、「西洋の中心が東洋の辺境を支配することなのだという同じ前提を理論化 (Theorizing on the same premise that colonialism was all about Western Center dominating over Eastern Periphery)」(30 頁) しようとするものだということである。こうした前提からは、日本による植民地統治のような、非西洋国家による非西洋の支配の構造を考察することはできない。呉論文は日本の植民地統治の特色のひとつとして、植民者日本と被植民者台湾・朝鮮との地理的、民族的、文化的な近接性を挙げる。この様々な近接性という点から、呉論文は「日本のオリエンタル・コロニアリズムは、むしろ植民地住民を搾取しつつ編入することを目的としたあいまいさを含んだ支配 (Japan's oriental colonialism was rather a rule of ambiguity aiming to exploit and incorporate the colonies)」(31 頁) を行なったと定義し、アンダーソン・チャタジー理論は以上の論点を含むように修正される必要があると指摘する。

それぞれの問題点を修正する形で構成されたアンダーソン・チャタジー理論は、以下のように定義づけられる。まず、「アンダーソン・チャタジー理論は植民地ナショナリズムを植民地化された人々の一部が、外側から課せられた植民地空間の排他的構造を批判し、解釈するための自律的な反応から発生するものとみなしている (the

Anderson-Chatterjee thesis understands colonial nationalism as arising from the autonomous actions on the part of the colonized to critique and interpret an exclusively structured colonial space that is imposed from without)」(35 頁)。そして、「植民地における民族の想像は、同時進行的な受容と抵抗、模倣と創造であり、そのように想像された植民地民族とは、植民地主義と反植民地主義との言説上のぶつかりあいを通じて形成された、広範囲にわたる構造物なのである (The colonial imaginings of the nation are simultaneously acceptance and resistance, imitation and creation, and the colonial nations so imagined are discursive constructs formed through the dialectical encounters between colonialism and anti-colonialism)」(同上)。

(4) ナショナルな領域とイデオロギーの形成

上述したアンダーソン・チャタジー理論の視点から、呉論文は以下の 2 つのプロセスを解明することに努める。それは、①「台湾ナショナリズムの領域的基盤の形成 (the formation of the territorial base of Taiwanese nationalism)」、②「台湾人をひとつの民族として解釈し想像した、ナショナリストのイデオロギーの形成 (the formation of a nationalist ideology that interpreted and imagined Taiwan as a nation)」である (36 頁)。そして、この 2 つのプロセスに日本によるオリエンタル・コロニアリズムが深くかかわっているとする。つまり、日本の植民地支配において台湾で台湾ナショナリズムが発生したことを考えるためには、①「支配と排除のための特定のシステムとしての日本によるオリエンタル・コロニアリズム (Japan's oriental colonialism as a particular system of domination and exclusion)」、②「台湾人という民族イメージの植民地的起源 (the colonial origin of Taiwanese national imaging)」、③「オリエンタル・コロニアリズムに対抗するイデオロギーとしての台湾ナショナリズムの発展 (the development of Taiwanese nationalism as an ideology in opposition to the oriental colonialism)」という 3 つの要素について検討する必要があるという。

ここで呉論文は、日本のオリエンタル・コロニアリズムについて論じている。その意図を呉論文は、「日本の『公式な帝国』の実質的範囲、すなわち、日本本土と 3 つのおもな植民地である台湾、樺太、朝鮮において、その帝国主義の主要な焦点は帝国の形成というよりは、むしろ国家と国民の形成にあった (within a substantial scope of Japan's "formal empire," which included Japan proper and its three sovereign colonies, Taiwan, Karafuto, and Korea, the ultimate goal of Japanese imperialism was less empire-building than state- and nation building)」(37 頁) と説明する。これは、なにも植民地の人々が一律に等しく「国民」として形成されたということ言うためではない。むしろ、日本はこの国民国家形成のプロセスにおいて、日本人の階層構造の最底辺に植民地の人々を編入する方針を打ち出していた。呉論文はこの方針を、「差別的編入 (differential incorporation)」(39 頁) と呼ぶ。

このような「差異的編入」のシステムは、小熊英二が言う『日本人』であって『日本人』ではない存在^③を作り出すことになる。呉論文はそのシステムのなかに、そうした状態を固定化する性質が含まれていたと指摘する。その性質を呉論文は、文化人類学の用語を用いて、「制度的に固定化された移行期 (institutional liminality)」(40 頁)と呼ぶ。このような日本の植民地統治のなかで、領域を基盤とする民族イメージが台湾では作り出されたと指摘する。

他方で、日本のような非西洋国が同じ非西洋国を植民地化するという状況から、植民地の人々は「二重の周縁化 (double marginality)」(41 頁) という状況におかれたと指摘する。これは端的に言えば、西洋の周辺におかれた日本によって、さらにその周辺に台湾や朝鮮がおかれたことを意味している。このような状況におかれた植民地のナショナリストは、「西洋の植民地主義と闘っている相手よりも、はるかに西洋主義的で近代主義的な方向へとイデオロギーを発展させることになった (...developed a much more comfortably pro-Western and modernist ideological orientation than their counterparts fighting against the Western colonialism)」(42 頁)。

以上のような特質をもつ日本のオリエンタル・コロニアリズムのもと、呉論文は台湾の人々が日本の提示する「不完全な近代 (incomplete modernity)」(44 頁) への批判を展開するに至ったと指摘する。ここに、呉論文がタイトルに掲げる「フォルモサ・イデオロギー」、つまり「反植民地主義的な台湾ナショナリズムの成熟したイデオロギー (a full-fledged ideology of anti-colonial Taiwanese nationalism)」が生じたと指摘する。Chapter2 以降の論述は、こうした理論的な枠組に即して歴史的事実の検討が積み重ねられることになる。

3. まとめにかえて—今後の課題—

以上が Chapter1 の概略である。呉論文は台湾ナショナリズムの発生と展開について、著名なナショナリズム研究のエッセンスを批判的に吸収し、それを台湾の歴史状況に適合的な形で修正を加えている。その過程のなかで、呉論文特有の用語が生み出され、Chapter2 以下の分析に活用されている。こうした固有の問題の概念化をどう翻訳するかということは困難な問題のひとつであった。ひとつの用語に含まれる意味内容は非常に複雑であったからである。しかし、多種多様に絡み合う諸問題をなんとか整理し、概念化しようとする呉論文の姿勢は、歴史研究にあつて十分参考になると思われる。問題の単純化に陥らない、精緻な理論化が歴史研究にも求められるといえる。

なお、Chapter2 では、日本の近代国民国家形成に関する問題が論じられる。東北地方、北海道、沖縄が抱える歴史意識は非常に複雑である。戊辰戦争に関するフィールド調査にあたって、今なお様々な歴史観が「郷土の歴史」として息づいていることを実感した。近代国民国家形成の歴史はその多様な歴史観・歴史経験の葛藤・相克のプロセス

であり、その延長線上に日本の植民地統治の問題も生じている。今年度のフィールド調査により、Chapter2 翻訳のための基礎資料を収集することはできた。次年度以降も研究活動を継続し、呉論文の完訳を期したい。

注

- (1) Anderson, Benedict. 1991. *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*. Revised ed. London and New York: Verso. 日本語訳は、ベネディクト・アンダーソン著、白石さや・白石隆訳『想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行—』、NTT 出版、1997 年。
- (2) Chatterjee, Partha. 1986. *Nationalist Thought and the Colonial World: A Derivative Discourse*. Minneapolis: University of Minnesota Press.
- (3) 小熊英二『「日本人」の境界—沖縄・アイヌ・台湾・朝鮮植民地支配から復帰運動まで—』（新曜社、1998 年）、4 頁。

引用文献 (Chapter1)

- ・ Binder, Leonard. 1964. “Ideological Foundations of Egyptian-Arab Nationalism.” In *Ideology and Discontent*, edited by D. E. Apter. New York: Free Press. (レオナード・バインダー著、遠峰四郎訳「エジプト・アラブ民族主義のイデオロギー的諸基礎」、デービッド・E・アプター編、慶応義塾大学地域研究グループ訳『イデオロギーと現代政治』、慶應通信、1968 年)
- ・ Anderson, Perry. 1992. “Max Weber and Ernest Gellner: Science, Politics, Enchantment.” In *A Zone of Engagement*. London and New York: Verso.
- ・ Tønneson, Stein, and Hans Antlov. 1996. “Asia in the Theories of Nationalism and National Identity.” In *Asian Forms of the Nation*, edited by S. Tønneson and H. Antlov. Richmond, Surrey TW9 2QA: Curzon Press.
- ・ Smith, Anthony D. 1991. *National Identity*. Reno: University of Nevada Press.
- ・ Anderson, Benedict. 1991. *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*. Revised ed. London and New York: Verso. (ベネディクト・アンダーソン著、白石さや・白石隆訳『想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行—』、NTT 出版、1997 年)
- ・ Chatterjee, Partha. 1986. *Nationalist Thought and the Colonial World: A Derivative Discourse*. Minneapolis: University of Minnesota Press.
- ・ Gellner, Ernest. 1983. *Nations and Nationalism*. Ithaca: Cornell University Press.
- ・ Smith, Anthony D. 1986. *The Ethnic Origins of Nations*. Oxford: Basil Blackwell.
- ・ Grosby, Steven. 1995. “Territoriality: the transcendental, primordial feature of modern societies.” *Nations and Nationalism* 1 (2).

- ・ Brass, Paul R. 1991. *Ethnicity and Nationalism: Theory and Comparison*. New Delhi/ Newbury Park/London: Sage Publications.
- ・ Henley, David E.F. 1995. "Ethnogeographic Integration and Exclusion in Anticolonial Nationalism: Indonesia and Indochina." *Comparative Studies in Society and History* 37 (2).
- ・ Lee, Chong-sik. 1963. *The Politics of Korean Nationalism*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press.
- ・ Horowitz, Donald. 1985. *Ethnic Groups in Conflict*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press.
- ・ Keyes, Charles F., ed. 1981. *Ethnic Change*. Seattle: University of Washington Press.
- ・ Sewell, William H. Jr. 1985. "Ideologies and Social Revolutionaries: reflections on the French Case." *The Journal of Modern History* 57 (1).
- ・ Baker, Keith Michael. 1990. "On the problem of the ideological origins of the French revolution." In *Inventing the French Revolution: Essays on French Political Culture in the Eighteenth Century*. Cambridge: Cambridge University Press.
- ・ Tarrow, Sidney. 1992. "Mentalities, Political Cultures, and Collective Action Frames --- Constructing Meanings Through Actions." In *Frontiers in Social Movement Theory*, edited by M. A. D. and C. M. Mueller. New Haven and London: Yale University Press.
- ・ Peattie, Mark R. 1984a. "Introduction." In *The Japanese Colonial Empire, 1895-1945*, edited by R. H. Myers and M. R. Peattie. Princeton: Princeton University Press. (マーク・ピーティエ著、浅野豊美訳『植民地：帝国50年の興亡』、読売新聞社、1996年)。
- ・ Chatterjee, Partha. 1993. *The Nation and Its Fragments: Colonial and Postcolonial Histories*. Princeton: Princeton University Press.
- ・ Brubaker, Rogers. 1996. *Nationalism Reframed: Nationhood and the national question in the new Europe*. Cambridge: Cambridge University Press.
- ・ Suny, Ronald Grigor, and Michael D. Kennedy. 1999. "Toward a Theory of National Intellectual Practice." In *Intellectuals and the Articulation of the Nation*, edited by R.G. Suny and M. D. Kennedy. Ann Arbor: The University of Michigan Press.
- ・ Terdiman, Richard. 1989. *Discourse / Counter-discourse: The Theory and Practice of Symbolic Resistance in Nineteenth-Century France*. Ithaca and London: Cornell University Press.
- ・ Rawls, John. 1993. *Political Liberalism*. New York: Columbia University Press.
- ・ Smith, Anthony D. 1991. *National Identity*. Reno: University of Nevada Press.
- ・ Turner, Victor. 1967. *The Forest of Symbols: Aspects of Ndembu Ritual*. Ithaca and London: Cornell University Press.
- ・ Fanon, Frantz. 1967. *The Wretched of the Earth*. Harmondsworth, Middlesex, England:

Penguin Books.

・ Césaire, Aimé. 2000. *Discourse on Colonialism*. Translated by Joan Pinkham. 1972. Reprint, New York: Monthly Review Press.

・ Memmi, Albert. 1967. *The Colonizer and the Colonized*. Translated by H. Greenfeld. Boston: Beacon Press.

・ Strauss, Leo. 1988. *Persecution and the Art of Writing*. Chicago: The University of Chicago Press.

・ Tully, James. 1988. “The pen is a mighty sword: Quentin Skinner’s analysis of politics.” In *Meaning and Context: Quentin Skinner and his Critics*, edited by James Tully. Princeton: Princeton University Press.

・ 鄭松筠「馬関条約と台湾の法律上の地位」(『台湾青年』第1巻第5号、1920年12月15日)。

・ 吳文星『日據時期臺灣社會領導階層之研究』(台北、正中書局、1992年)。

・ 小熊英二『「日本人」の境界—沖縄・アイヌ・台湾・朝鮮植民地支配から復帰運動まで—』(新曜社、1998年)。